

選択の合理性について： wise self-interest の仏教経済倫理

辻村 優英

(和文要旨)

「仏教経済学」の基本的な視点は西洋経済学を批判することであり、西洋経済学における self-interest と仏教的な慈悲が、それぞれ「利己」と「利他」によって特徴付けられ、互いに対立・反目するものであるかのように捉えられてきた。しかし、このような単純な対立構造に集約することはできないのではないか。このことを明らかにするため、本論文では、選択の合理性に着目し、特にダライ・ラマ 14 世の wise self-interest を取り上げながら、アマルティア・センの議論との類似性に迫る。自己利益は他者利益の追求のうちにあるという wise self-interest における合理性は、理性的精査としての合理性という点において、現代経済学と同じく self-interest の追求を目的とした合理性であると考えられる。

(SUMMARY)

The basic standpoint of Buddhist economics is to criticize Western economics. It is supposed that “self-interest” in the theory of Western economics, regarded as being “egoistic,” is opposed to the Buddhist philosophy of “love and compassion,” regarded as being “altruistic.” I would like to argue, however, that it is impossible to place the two theories into such a simple conflictual structure. In this paper, focusing on the rationality of choice, we discuss this conflict, and demonstrate a similarity between the theory of rationality presented by Amartya Sen and the theory of “wise self-interest” offered by the 14th Dalai Lama. The rationality in wise self-interest, which argues that the best way to look after self-interest is to take care of the interests of others, is similar to the rationality observed in modern economics in terms of rationality as the use of reasoned scrutiny.

はじめに 仏教と経済にかんする研究の潮流と本稿の目的

仏教と経済にかんする研究を大きく二つに分けるとすれば、記述的な研究と、規範的な研究に分けることができる。

記述的な研究としては、仏教経済思想あるいは仏教経済史を挙げることができる。これは古典文献に描かれている仏教教団の経済的活動や規範を文献学的に精査し、そのなかから経済に関する出来事やその思想的側面を炙り出して記述する研究である。

他方、規範的な研究としては仏教経済学を挙げることができる。これは、貧富の格差、天然資源の搾取など現代資本主義経済の負の側面を指摘し、警鐘を鳴らした経済学者エルンスト・シューマッハを嚆矢とするもので、資本主義の短所を乗り越える経済学を、仏教的理念を基盤にすえて構築しようとするものである。シューマッハが名付けた「仏教経済学」(Buddhist economics) [Schumacher 2011(1973): 38]、その基本的な姿勢は現在も東南アジアを中心とする仏教者たち(パユットー、スラック・シワラクなど)や欧米の研究者(ブダペスト・コルヴィヌス大学経営倫理センター(the Business Center at the Corvinus University of Budapest)のLaszlo Zsolnaiら)によって探究されており、以下の図のように西洋経済学との対比において特徴づけられている [Zsolnai 2011: 183]。

図: 西洋経済学と仏教経済学の特徴 (Characteristic of Western economics and Buddhist economics) [Zsolnai 2011: 183]

西洋経済学 Western economics	仏教経済学 Buddhist economics
利益最大化 Maximize profit	苦の最小化 Minimize suffering
欲望最大化 Maximize desires	欲望最小化 Minimize desires
市場最大化 Maximize market	暴力最小化 Minimize violence
道具的利用最大化 Maximize instrumental use	道具的利用最小化 Minimize instrumental use
自己利益最大化 Maximize self-interest	自己利益最小化 Minimize self-interest
大きいほど良い "Bigger is better"	小さいことは美しい "Small is beautiful"
より多く "More is more"	より少なく "Less is more"

「選択の純粹論理」(pure logic of choice) [Caldwell 1986: 6] とも言われる西洋経済学を中心となる概念の一つが自己利益 (self-interest) であり、エッジワースによれば、経済学の第一原理は自己利益のみによる選択的行為の動機づけである [Edgeworth 1881: 11]。従来の仏教経済学の基本的な視点はこうした経済学を批判することであり、自己利益の追求を主眼とする経済原理が非倫理的であるという主張を暗黙の前提とした上で、慈悲・非暴力・少欲知足といった仏教の倫理的徳目の優位性を説く傾向がある [Preecha 2004][Zsolnai 2009]。そこでは西洋経済学における自己利益と仏教的な慈悲が、それぞれ「利己」と「利他」によって特徴付けられ、互いに対立・反目するものであるかのように捉えられてきた。確かに、経済的活動における選択の動機に着眼すれば、このような対立的構図になるのは当然のように思われる。しかし、西洋経済学と仏教経済学はこのような単純な対立構造に集約することはできず、着眼点を変えれば対立構造の中にも共通点が見出せるのではないか。この問題を本稿では、選択の合理性に着目し、「自己利益」に焦点を当てて考察する。

「限定された合理性」(bounded rationality) を提唱したハーバート・A・サイモンをはじめ、経済学における合理性の検討を行った経済学者のなかでも、アマルティア・センは本稿で扱う問題に関して際立った議論を展開している。それは、経済学においてこれまで支配的だった合理性の自己中心的な自己利益理解を脱却させようとしたことである。他方で、ダライ・ラマ 14 世は「賢明な自己利益」(wise self-interest) という概念を提唱することによって、没我的で自己犠牲的な動機に偏りがちな理解を脱却し、仏教における利他的な振る舞いを自己利益という観点から捉え直した。アマルティア・センとダライ・ラマ 14 世、この両者において、経済学と仏教における合理性と自己利益の捉え方は対立するどころか、歩み寄っている。もちろんこの両者をもってして、西洋経済学と仏教経済学を代表させるわけではないが、これまで一般に考えられてきた西洋経済学と仏教経済学の対立構造を見直すためのひとつの視点を与えているのは確かである。

アマルティア・センにおける合理性と自己利益

アマルティア・センによると、現代の経済学を実質的に支配してきたのは、合理性についての自己利益説であって [Sen 2004(2002): 22]、合理的な振る舞い (rational behavior)

を自己利益追求として理解するモデルは、自己中心的な以下の3要素をすべて要請する [Sen 2004(2002): 33-34][Sen 1988(1987): 80]。すなわち、①自己中心的厚生 (self-centered welfare) : ある人の厚生は (他者に対するいかなる共感も反感も持たず、いかなる手続き的な関心も無く) もっぱら自分自身の消費や、生活の豊かさの他の特徴にのみ依拠している。②自己厚生目標 (self-welfare goal) : ある人の唯一の目標は自分自身の厚生の最大化である。③自己目標選択 (self-goal choice) : ある人の選択は自分自身の目標追求に完全に基づかなければならない。 [Sen 2004(2002): 33-34]

センによれば、西洋経済学の合理性に対する二つの中心的な理解 (内的整合性および自己利益) のうち、支配的である自己利益追求アプローチにおいては、自己中心的な自己利益以外のいかなる目標追求も理性的な選択として認めない [Sen 2004(2002): 228]。そこには他者が関与する余地が残されていないわけである。このような合理性の理解は、追求すべき事柄について推論する自由を見過ごすことによって、自由かつ理性的な存在としての「自己」を打ち砕くものであり [Sen 2004(2002): 46]、社会的な諸関係において生きる人間存在を「合理的な愚か者」 (rational fool) に貶めるものだとセンは批判している [Sen 1982: 99]。

センによれば、われわれは純粋な「ただの私」だけでなく、共同体、ナショナリティ、階級、人種、性別、労働組合員、寡占企業のフェローシップ、革命の連帯など、そうした文脈次第で自分自身を多様に理解し、厚生・目標・行動義務に対する見方を規定する多様なアイデンティティを持ちうる [Sen 2004(2002): 215]。それゆえ、われわれの振る舞いは、上述の自己中心的な3要素とは異なり、以下のように他者が関与するものでありうるのだとセンは言う。すなわち、①ある人自身の厚生についての観念は、他者への「共感」¹ を超えて実際に他者と同一化するような形で、他者の立場によって影響される。このセンの考えは、彼のいうコミットメント² によって自身の厚生を度外視した

¹ センにおける「共感」 (sympathy) は、「ネガティブな反感 (antipathy) も含めて、例えば苦難を見て気分が落ち込むように、ある人の厚生が他者の立場によって影響を受けることに関係し、「特に自己中心的な厚生を侵害する」ものである [Sen 2004(2002): 214]。また、「共感に基づく振る舞いは、他者の喜びによって喜び、他者の苦悩によって苦悩するのであるから、一つの重要な利己的な感覚」であって、「自分自身の効用の追求が共感的行動によって促進される」 [Sen 1982: 92]。

² センによると「コミットメント (commitment) は、(共感しようがしまいが) 個人の厚生と (たとえば、たとえ個人的に苦しみを受けないにせよ、苦難を取り除く手助けをする行為のように) 行為の選択との結びつきを壊すことに関係」しており [Sen 2004(2002): 214]、それは「ときとして、結果にかかわらず行動する義務感 (a sense of obligation) と関係している」 [Sen

行為、たとえば自身の危険も顧みずに溺れている人を助けようとするような行為を選択し得ることを意味している。②同様に、目標の到達に際し、ある人のアイデンティティの感覚はかなり中心的でありうる。③私的な目標の追求は、アイデンティティのある種の感覚を持つ集団における他者の目標についての熟考によって妥協させられている [Sen 2004(2002): 215]。

このようにわれわれの選択的な振る舞いが純粹に自己のみによって規定されるのではなく、大いに他者の影響を受けるものだと考えるセンは、「理性的精査としての合理性」(rationality as the use of reasoned scrutiny) [Sen 2004(2002): 5]として合理性を規定している。このような合理性は、目標や価値を理解し評価するための推論の使用や、体系的な選択のために目標や価値を利用することを含んでいる [Sen 2004(2002): 46]。こうした合理性の理解のうちには、自己中心的な自己利益を必須とする理解において排除されていた要素、すなわち他者に関連する目標や価値についての理性にもとづく精査が含まれる。センは、自己中心性だけでなく、他者中心性にもとづくものにまで合理性の理解を拡張したのである。

ダライ・ラマにおける合理性と wise self-interest (賢明な自己利益)

ダライ・ラマ 14 世の思想において「合理性」(rationality) にあたる概念を見出すのは容易ではない。しかし合理性をセンが言うような「理性的精査としての合理性」と理解するならば、これに近いチベット語の概念「ナムヂュー」(nam dpyod) を指摘することができる。「ナムヂュー」(nam dpyod) は「ナンパル・ヂューパ」(nam par dpyod pa) を短縮した形である。ナンパル (nam par) は「完全に、詳しく」などを意味し、ヂューパ (dpyod pa、漢訳では「伺」) は例えば『大乘阿毘達磨集論』において、「意思(思)あるいは洞察(慧)³ に依存し、個々それぞれを分析する心(意言)であって、そ

1982: 104]。「他者の苦悩があなたを悩ませないけれども、他者が苦しむのをよくないことと考え、それを止めようとする用意があれば、それはコミットメントにあたる」[Sen 1982: 92]。「ある人にとって実行可能な他の行為に比べて自身の厚生がより低くなってしまふような行為を選択する、ということがコミットメントを定義するひとつの方法である」[Sen 1982: 92]。「共感よりもむしろコミットメントの方が非利己的である」[Sen 1982: 92]。センによれば、「自己利益的であること(それは他者への共感を含めうる)と自己中心的であること(それは他者への共感を認めない)とは対照的である。コミットメントはこれら両者を超えたところにある」[Sen 2004(2002): 31]。

³ 『大乘阿毘達磨集論』において「意思」(思)は「心を作動させようとする心の働きであって、

れは細やかな心である」と定義されているように、「分析・精査」を意味する。本稿ではひとまずナムヂューを「理性的精査」⁴と和訳しておきたい。

ダライ・ラマによると、「人類には理性的精査 (nam dpyod) の能力が明らかに存在する。人間の理性的精査の能力によって自分自身と社会の利益と幸福を達成すべきである」[Dalai Lama 2008(2007): 2]。彼において、理性的精査に基づく合理的な選択は、自己利益を否定するどころか、自己利益を肯定し、それを達成するためにあるべきだとされる。とはいえ、ここでいう自己利益は、自己中心的な狭義のものではない。

私はいつも、もし自分を愛するなら、理性的精査を伴った自愛 (nam dpyod ldan pa'i rang bces 'dzin) であるべきで、短絡的な自愛であってはならない、と言っている。理性的精査を伴った人は、他者の利益と幸福に思いをめぐらして役立つと邁進する。……そのようにした結果として最終的に自分自身に大きな利益が訪れることは明らかである。……これが理性的精査を伴った自愛のやり方である [Dalai Lama 2006(1998): 206]。

ダライ・ラマは自己利益のみを追求するのは「愚かにも利己的」だが、利他の実践者たる菩薩は「賢明にも利己的」であると考えており [Dalai Lama 2003: 14]⁵、他者利益の追求を通して実現される自己利益⁶を wise self-interest (賢明な自己利益)と呼んでい

善・不善・無記の行為に対して心を差し向けようとする働きをとまなうものである」と定義され、「洞察」(慧)は「分析対象となる諸現象を充分によく分析することであって、疑惑を阻止する働きをとまなうものである」と定義される。

⁴ ダライ・ラマによると「西洋思想は理性 (reason) と情念 (passions) を区別したが、仏教心理学は感情的な状態 (emotional states) と認知的な状態 (cognitive states) を区別しなかった」[Dalai Lama 2005a: 175]。とはいえ、「ニンジェ (共苦) とは感情移入と理性の組み合わせであると理解することができる」[Dalai Lama 1999: 73-74]と述べているように、分析的な心の働きについて「理性」という言葉をダライ・ラマは用いているので、ナムヂューを「理性的精査」と訳すのは「最適」ではないかもしれないが、「可能」ではある。

⁵ 「自分自身の自己利益や望みは、実際に他の生けるもののために働いた副産物として満たされる。15世紀の有名な師であるツォンカパは『菩提道次第広論』のなかで、「実践者が他者の幸福の実現にむけて考えて行動すればするほど、その実践者自身の切望は、特別な努力なしに副産物として満たされ、実現するだろう」と述べている。あなた方のなかには、私が常々次のように述べていることを思い出した方がいるかもしれない。菩薩すなわち仏教における共苦の実践者たちはある意味で「賢明にも利己的」(wisely selfish)な人びとであって、われわれは「愚かにも利己的」である、と」[Dalai Lama 2003: 14]。

⁶ 他にも、「賢明な利己 (wise selfish)」[Dalai Lama and Chan 2004: 222]、「本当の利己主義者 (dngos gnas drang gnas kyi rang don bsam mkhan)」[Dalai Lama 2002(2000): 91]といった言葉も用いている。

る⁷ [Dalai Lama 1999(1997): 10]。そして wise self-interest は、すでに見たセンのアイデンティティ理解と同様に、他者と相互依存的に関係づけられたアイデンティティによって基礎づけられるものである⁸ [Dalai Lama 1999: 47]。ダライ・ラマの wise self-interest は菩薩の行いをモデルにしている。「菩薩」は元来、その前世も含めて「仏陀」となる以前の釈迦を指す言葉だった。そうした菩薩の具体的な言行録のなかから、「賢明な自己利益」に基づいた経済的活動における選択を見出すことができる。釈迦の前世譚『ジャータカマラー』の「長者本生」によれば、釈迦は前世において莫大な財を有する長者だった。彼は自分の幸福のために財産を独り占めすることなく、世間の人々と共有し、困窮者への布施を惜しむことはなかった。あるとき悪魔が彼の元へやってきて財産はダルマの原因であるから、財産を分け与える布施は悪であると言った。それに対して長者は、布施を除いて他にダルマの道はない、と反論し倦むことなく布施に邁進した [Dpa' bos mdzad pa 2006: 26-30]。釈迦はこうした利他的な選択的行動を取り続けたことによって、最終的に最高の自己利益である涅槃に達したのだとされる。

wise self-interest の二側面

ダライ・ラマのいう wise self-interest には①内的側面（人格帰結主義的）と②外的側面（行為帰結主義的）の二つを見出すことができる。

① 内的側面（人格帰結主義的）

ダライ・ラマによれば、共苦にもとづく実践によって、他者への利益は50%かもしれないが、自分へは100%の利益があるのであって、共苦を実践する主たる動機は自己利

⁷ 「同じ人間としてわれわれを取り巻いているすべての他者の切望や感情を度外視して、自分自身の幸福を推し進めようとするのは、道徳的に間違っているだけでなく、実際的に愚かである。賢明なのは、自分自身の幸福を追求するときにも、他者のことを考えに入れることである。これは、私が「賢明な自己利益」(wise self-interest) と呼ぶものへと導くであろう。それは、うまくいけば自己利益を「折衷の自己利益」(compromised self-interest) あるいは、「相互的利益」(mutual interest) へと変化させるものである」 [Dalai Lama 1999(1997): 10]。

⁸ 「もし自己が固有のアイデンティティを持っているならば、他者の利益から孤立した自己利益というものを語るができるかもしれない。しかしそうはならない。なぜならば、自己と他者は関係性のなかのみ理解できるものだからである。自己利益と他者の利益は密接に関係づけられている。実際、縁起する現実という状況において、他者の利益とまったく関係のない自己利益はありえないことが理解できる。現実の核心に横たわっている根本的な相互関連ゆえに、あなたの利益は私の利益でもある。ここから次のことが明らかになる。「私の」利益と「あなたの」利益は深く関係づけられている。深い意味で、それらは収斂するのである」 [Dalai Lama 1999: 47]。

益にある⁹ [Dalai Lama 2004(2003): 284]。この考えは仏典のうちに見出すことができる。例えばダライ・ラマが属するチベット仏教ゲルク派の開祖ツォンカパは『菩提道次第略論』において、布施の完成（布施波羅蜜）は、自らが所有する財産に対する吝嗇（けち）や貪欲といった執着を破るということによって完成するのであって、施し物を他者に与えたことによって他者の貧窮を無くすことそれ自体とは関係がない[117a4]、と述べている。ここにおける利他的行為（布施）の主眼は実際に他者の役に立てたかどうかということではなく、自分自身の苦しみの原因となる心の状態を克服すること、すなわち人格帰結主義的な自己利益にある。同様の考えは釈迦の伝記『ブツダチャリタ』にも見ることができる。そこには、誰であろうと布施することによって自分自身の執着が断たれ、他者に慈愛（byams pa）の心で布施すれば自身の内にある憎悪と高慢が取り除かれるのだ、と仏陀が説く場面が描かれており [Rta dbyangs 1985: 68a4-5]、利他的行為によって自己の苦しみの原因となる煩悩を取り除くという自己利益の実現が示されている。

② 外的側面（行為帰結主義的）

ダライ・ラマによれば、それぞれの共同体が他へ及ぼす影響力が限定されていた過去とは異なり、一地域で起こったことが最終的に多くの他の地域に影響を及ぼすほど緊密に相互依存している現代世界では、自己利益は他者利益の追求の中にある¹⁰。他者の利益とまったく関係のない自己利益はありえず、社会的な出来事における他者利益と自己利益は深い意味で収斂するのだから¹¹、利他的な行為が結果的に自己利益を満たすとい

⁹ 「共苦の問題に立ち戻ると、共苦や慈愛を育むことは他者のためにするものであるという印象をよく受けるであろう。しかし、それは表面的な見方にすぎない。共苦を実践する自分の経験から感じるのは、すぐさま直接の利益があるのは他者ではなく自分自身だということである。共苦を実践することによって、他者への利益は50%しかないかもしれないが、自分へは100%の利益がある。それゆえ、共苦を実践する主たる動機は自己利益なのである」 [Dalai Lama 2004(2003): 284]。

¹⁰ 「人間社会が歴史的に重大な局面に直面していることは明らかである。今日の世界において、われわれは人類の一体性を認める必要性に迫られている。過去において、それぞれの共同体が互いを根本的に別のものだと考えていても問題はなかった。しかし今日、アメリカで最近起こった悲劇的出来事からわかるように、一地域で起こったことは何であろうと最終的に多くの他の地域に影響を及ぼす。世界はますます相互依存するようになっている。この新しい相互依存状況において、明らかに自己利益は他者の利益を考えることの中にある」 [http://www.dalailama.com/page.99.htm. 2009-08-26]。

¹¹ 「もし自己が固有のアイデンティティを持っているならば、他者の利益から孤立した自己利益というものを語るができるかもしれない。しかしそうはならない。なぜならば、自己と他者は関係性のなかのみ理解できるものだからである。自己利益と他者の利益は密接に関係づけられている。実際、縁起する現実という状況において、他者の利益とまったく関係のない自己利益はありえないことが理解できる。現実の核心に横たわっている根本的な相互関連ゆえに、あなたの利益は私の利益でもある。ここから次のことが明らかになる。「私の」利益と「あなた

う行為帰結主義的な側面をここに見出すことができる。

ダライ・ラマが言うような、他者利益と自己利益の相互依存関係に関連する理論としては、ギャレット・ハーディンが論文“The Tragedy of the Commons”(1968)において問題提起した「コモンズの悲劇」を挙げることができる。これは、誰でもが自由に利用できるオープンアクセスな共有地(コモンズ)における限られた資源は、自己中心的な自己利益の最大化を目指した乱獲によって枯渇し、利用者全体に不利益が生じてしまうという悲劇である。大気汚染・地球温暖化・海洋汚染のような地球環境問題は、「コモンズの悲劇」の一例だと言える。こうしたコモンズの悲劇を回避し、資源利用者の「賢明な自己利益」を追求する事例の一つを、14世紀のチベットにおける政策のうちに見ることができる。パクモドゥ・カギユ派政権の時代に為政者チャンチュブ・ギャルツェンは法令『如意宝蔵』において、「家の亀裂の修理や小舟の作成などをしないわけにはいかないから、無尽資源¹²、すなわち土地から菩提心¹³を生じて植樹の管理をしなければならない。すべての場所は樹木の状態が悪くなったからといって倒さず、季節によって樹木を根絶やしにせず、鎌と鋭い道具によって時が来たら切っても、切った後に、植樹すべきである」として、利他的動機に基づいた植樹による森林資源の維持を「無尽資源」と呼んだ [zla ba tshe ring 2004: 265-266]。樹木の再生能力に依拠したシステムティックで持続可能な天然資源の利用が可能となることによって、結果的に森林資源利用者の自己利益が満たされる方法を「無尽資源」は示している。

「無尽資源」のようにオープンアクセスの資源を利他的に利用しあうことによって、利用者全体の利益をもたらすことに成功している現代的な事例として、パソコンのOSの一つであるLinuxやWikipediaなどにおけるクラウドソーシングを挙げることができる。クラウドソーシングという言葉の産みの親であるジェフ・ハウによれば、無名の多くの開発者たちはインターネット上のコミュニティにおける利他的な動機によってLinuxやWikipediaの作成に関わり、利用者全体の便益に寄与することによって人々からの信望という報酬を得ることになる。これは、「賢明な自己利益」が実現する一例だと見ることができる。

の」利益は深く関係づけられている。深い意味で、それらは収斂するのである」[Dalai Lama 1999: 47]。

¹² mi mdzad pa'i gter とあるが意味をなさないので mi 'dzad pa'i gter と読む。

¹³ 『現観莊嚴論』に「菩提心を発することとは、他者の利益のために、正しく完全なる悟りを欲すること」[Byams pa (Maitreya) 1985: 2b5] とあり、ダライ・ラマによれば菩提心の中心は、共苦と、利他を実現するための悟りへの希求にある [Dalai Lama 2005b: 119]。

wise self-interest と理性の狡知

wise self-interest は、計算高く自己利益になる利他的行為のみを手段として選択するような、一般的な意味での理性の狡知と同じではない。すでに見たように wise self-interest は菩薩の行為をモデルとしている。たとえば、『金剛般若経』において「スプーティよ、菩薩は、事物に執着せず布施をせよ。……菩薩は執着せずに布施することによって、功德の集まりは、スプーティよ、簡単に測り得ないほど大きいからである」[*phags pa shes rab* 1985: 122a1-3]と説かれ、ヴァスバンドゥ¹⁴ の『金剛般若経論』において「もし菩薩が布施波羅蜜の結果を追い求めて布施をするならば、それは事物に執着した布施である」[*Dbyig gnyen* 1985: 187b5-6]と注釈されている。菩薩は、利他的行為が結果的に大きな功德という自己利益をもたらすことを知っているし、そうした自己利益を目的としてもいる。しかしながら、自己利益達成のための手段として利他的行為を選択するのではない。シャーンティデーヴァ『入菩薩行論』の言葉を借りれば、「自他平等」すなわち自他共に苦を欲しないという点で等しいから、利他的行為も目的として選択するのである。表面（利他的行為）を辿っていけばいつの間にか裏面（自己利益）に行き着く表裏一体のメビウスの環に例えることができよう。

結論 合理性をめぐる経済学と仏教の交差点

これまで見てきたダライ・ラマの wise self-interest は、センが経済学において支配的だと指摘した自己中心的な自己利益説とは対極にある。この点において、経済学と仏教が対立するのは確かだろう。しかし合理性を、センのいうような合理性すなわち自己中心性にかぎらず他者中心性をも含みうる理性的精査として理解し、その合理性という観点から自己利益追求について考えるとき、経済学と仏教に共通する側面を見出せる。それは、センが合理性を理性的精査という観点で捉え直した経済学的議論と、ダライ・ラマが利他的な動機と行動を、理性的精査を伴った自愛あるいは wise self-interest だと捉える仏教的議論の交差点にある。自己利益は他者の利益を追求することによって実現するという旨を概念化した wise self-interest における選択の合理性は、現代経済学のそれ

¹⁴ チベットでは世親に帰せられている。

と原則的には同じであり、両者ともに自己利益の追求を目的とした合理性である、と考えられる。

文献表

- Badiner, Allan H. (ed.) 2002, *Mindfulness in the Marketplace: Compassionate Responses to Consumerism*, Parallax Press, Berkeley.
- Benavides, Gustavo 2005, "Economy", *Critical Terms for the Study of Buddhism*, edited by Donald S. Lopez Jr., The University of Chicago Press, Chicago, pp. 77-102.
- Byams pa (Maitreya) 1985, *shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan shes bya ba'i tshig le'ur byas pa*, sde dge bstan 'gyur, shes phyin, ka, 1b1-13a7, CD-Rom, W23703-1396, Tibetan Buddhist Resource Center, New York.
- Caldwell, B.J. 1986, "Economic methodology and behavioral economics: an interpretive history", *Handbook of Behavioral Economics* edited by Gilad, B., Kaish, S., vol. A. JAI Press, Greenwich, pp. 5-17.
- Dalai Lama 1999(1997), *Love, Kindness and Universal Responsibility*, Paljor Publications, India.
- Dalai Lama 1999, *Ethics for the New Millennium*, Riverhead Books, New York.
- Dalai Lama 2002(2000), *bod gans can gyi khyad nor*, rigs slob lhag rtseg tsogs chung, Dharamsala, India.
- Dalai Lama 2003, *The Compassionate Life*, Wisdom Publications, Boston.
- Dalai Lama 2004(2003), *Destructive Emotions, How can we overcome them?, A Scientific Dialogue with the Dalai Lama*, narrated by Daniel Goleman with contributions by Richard J. Davidson, Paul Ekman, Mark Greenberg, Owen Flanagan, Matthieu Ricard, Jeanne Tsai, the Venerable Somchai Kusalacitto, Francisco J. Varela, B. Alan Wallace, and Thupten Jinpa, Bantam Books, New York.
- Dalai Lama 2005a, *The Universe in a Single Atom*, Morgan Road Books, New York.
- Dalai Lama 2005b, *The Four Noble Truths*, translated by Geshe Thupten Jinpa, Harper Collins Publishers, India.

- Dalai Lama 2006(1998), *sems kyi zhi bde, rigs slob lhag brtsegs tshogs chung*, Dharamsala, India.
- Dalai Lama 2008(2007), *bod kyi nang chos ngo sprod snying bsdus*, sku bear rnam par rgyal ba phan bde legs bshad gling grwa tshang gi shes yon lhan tshogs, India
- Dalai Lama and Victor Chan 2004, *The Wisdom of Forgiveness*, Riverhead Books, New York.
- Dpa' bos mdzad pa 2006, "skyes pa'i rabs kyi rgyu", *rgya gar gyi slob dpon chen po dpa' bos mdzad pa'i skyed pa'i rabs kyi rgyud dang slob dpon chen po bi dya' sing has mdzad pa'i skyes rabs dka' 'grel bcas bzhugs so*, bod gzhung shes rig dpar khang, pp. 1-342.
- Dbyig gnyen 1985, *'phags pa bcom ldan 'das ma shes rab kyi pha rol tu phyin pa rdo rje gcod pa'i don bdun gyi rgya cher 'grel pa*, sde dge bstan 'gyur, shes phyin, ma, 178a5-203b7, CD-Rom, W22084-0919, Tibetan Buddhist Resource Center, New York.
- Edgeworth, F. Y. 1881 *Mathematical Psychics : Essays on the Application of Mathematics to the Moral Sciences*, C. Kegan Paul & Co., London.
- 'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa rdo rje gcod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* 1985, sde dge bka' 'gyur, shes phyin, ka, 121a1-132b7, CD-Rom, W22084-0919, Tibetan Buddhist Resource Center, New York.
- Preecha Changkhwanyuen 2004, "Buddhist Analysis of Capitalism", *The Chulalongkorn Journal of Buddhist Studies*, Vol. 3, No. 2, pp. 247-259.
- Rta dbyangs 1985, *sangs rgyas kyi spyod pa zhes bya ba'i snyan dngags chen po*, sde dge bstan 'gyur, skyes rabs, ge, 1b1-103b2, CD-Rom, W23703-1488, Tibetan Buddhist Resource Center, New York.
- Schumacher, E. F. 2011(1973), *Small Is Beautiful: Economics As If People Mattered*, Vintage Books, London.
- Sen, Amartya 1982, *Choice, Welfare and Measurement*, Harvard University Press, , Cambridge.
- Sen, Amartya 1988(1987), *On Ethics and Economics*, Blackwell Publishing, Oxford.
- Sen, Amartya 2004(2002), *Rationality and Freedom*, The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge.
- Zsolnai, Laszlo 2009, "Buddhist Economics for Business", *Ethical Prospects: Economy, Society and Environment*, edited by Laszlo Zsolnai, Zsolt Boda, Laszlo Fekete, Springer, London, pp. 89-99.

Zsolnai, Laszlo 2011, “The Contributions of Buddhist Economics”, Ethical Principles and Economic Transformation—A Buddhist Approach, edited by Laszlo Zsolnai, Springer, London, pp. 183-196.

Zla ba tshe ring dang bstan 'dzin rnam rgyal 2004, *bod kyi srol rgyun rig gnas dang deng dus kyi khor yug srung skyob*, mi rigs dpe skrun khang, pe cin.

Zla ba grags pa (Candrakīrti) 1985, *dbu ma la 'jug pa'i bshad pa zhes bya ba*, sde dge bstan 'gyur, dbu ma, 'a, CD-Rom, W23703-1418, Tibetan Buddhist Resource Center, New York.

* 本稿は、科研費若手 B 「wise self-interest の仏教経済倫理: ダライ・ラマ 14 世を中心に」(代表: 辻村優英、研究課題番号: 15K16624) の研究成果の一部である。

キーワード: 合理性、自己利益、賢明な自己利益、仏教経済学、ダライ・ラマ 14 世、アマルティア・セン

Keywords: rationality, self-interest, wise self-interest, Buddhist economics, the 14th Dalai Lama, Amartya Sen